

インスピレーションの 世代

家族経営のマニュファクチュールとは、家系図をはるかに超えた存在である。後継者は、血統だけでなく、価値観、ビジョン、理解を共有しなければならない。ニコラス・フォークスとの感動的な会話の中で、ティエリー・スターンが父フィリップにまつわる幼少期の思い出と、父が今でも日毎彼に与え続けるインスピレーションを語る。

ティエリー・スターンは、本人も認めるように、後ろではなく前を見て生きる男である。「過去について話すのは難しい。過ぎたことは過ぎたこと、私は過去の思い出には執着しません」と彼は言う。

しかし彼の父の業績に敬意を表するこの「パテックフィリップ マガジン」特集号でティエリーが試みていることは、過去について語ることに他ならない。彼が子供時代の逸話を語るのを聞くと、すぐにチャールズ・ディケンズ研究の第一人者、デイヴィッド・セシル卿がかつて小説『デイヴィッド・コパフィールド』について書いた言葉が想起される。「子供にとっての世界は、多くの大人の世界に比べてより誇張され、より明るく照らされ、影はよりくつきりとしているが、それが正に子供の目を通して見た世界なのである。」

ティエリーの父についての最も古い記憶が、フィリップ・スターンの2つの大きな情熱、セーリングと時計製作に関するものであることは驚くに当たらない。「私の最も古い記憶は、父がセーリングをしていた時のことです（下の写真）。彼は卓越したヨットマンでした。幼い頃から、彼が帆走することではなく、常にレースを望んでいることは私にとって明らかでした。湖上でチームと一緒に勝利を祝っている父の姿を見て、私は父が本当に頑固な人だということも知ったのです。彼は勝つことが好きです。」

もうひとつの幼時の記憶は、ロヌヌ通りの父のオフィスに座っていた時のことです。私は6歳以上にはなっていないかったでしょう。父が机で仕事をしている間、私は床に座っていました。玩具で遊んでいたのですが、陳列戸棚の引き出しのひとつを開けてみると、プロワ産の懐中時計が目に入ったのです。」

ティエリーは17世紀初頭のこれらの宝物をわずか数分間しか垣間見ることができなかったが、それは6歳の心に深く刻み込まれた。「たいへんよく覚えていますが、美しいものでした。これは父との最初の思い出のひとつでもあります。父は引き出しを開けることを許しましたが、時計には触らせませんでした。匂い、赤い裏地、そして青い懐中時計のことを今でも覚えています。」



【前ページ】
2009年、フラン・ワットのマニュファクチュールにて、スターン氏がその年にパテックフィリップの次期社長となる息子のティエリーを見下ろしている。
【当ページ】
（右）ティエリー（手前）、アンリ（中央）、およびフィリップ（奥）のスターン家の3世代。時計製作の専門知識は、何十年にもわたってこの

家族経営の会社の世代から世代へと受け継がれてきた。（中央）競争心旺盛なフィリップ・スターンは1977年から1992年にかけて、いずれも「アルタイル」と名づけられた多胴船を駆ってボルドール・ヨットレースで7回優勝した。（左）ロヌヌ通りの旧本社で事業を統括するフィリップ・スターン。彼の在任中の2006年、この建物はジュネーブ・サロンとして改築された。

PHOTOGRAPHS: JASON BELL, JACQUES-HENRI ADDOR



ある意味でこれはティエリーが何百万人もの人々と共有する記憶、すなわち仕事上の父を訪ねた息子の記憶であるが、個人的に重要な記憶でもあった。「後になって、私は父に時計がつくりたいと言いました。父は押しつけることはせず、いつも私にこう言いました。「急ぐことはない。決めるには十分な時間がある。」しかし私は決して考えを変えませんでした。」

ティエリーは成長し、ロース通りの本社は彼の遊び場となった。「10歳くらいの頃でした。どのアシスタントも私にキャンディーをくれ、古いエレベーターに乗るのが楽しかったです。素敵な木製のエレベーターで、美しい扉が付いていました。床板の隙間から階下の店内が見える会議室があり、店内の会話が筒抜けでした。私は建物の中を走り回り、例えば長い間父の下で働いていた至極真面目なバックス氏や、ミュージアムのコレクション拡充に多大な努力をしたバンベリー氏、そしてオフィスが隣接していた父と祖父に印象づけられました。2人の部屋はドアで連結され、ひとつにはパイプタバコの匂いが、もうひとつには紙巻きタバコの匂いが立ち込めていました。」

オフィスの外では、父と祖父のうち、祖父のアンドリュー・スターンはより社交的であった。「祖父の家では、湖上でたくさんの人たちと昼食をとったのを覚えています。彼ら全員が一緒にいるのを見て、子供ながら私は本当にパテック・フィリップ・ファミリーの一員であると感じ始めました。当時の時計事業は主に家族経営であったため、皆知り合いました。毎年夏になると祖父は大規模なパーティーを主催し、父も含めて全員が出席しました。それは始めるといつ終わるか分からない昼食でした。大きなバーベキュー設備と大テールの置かれた巨大なテントがあったことを覚えています。」

祖父の家のバーベキューのような楽しい思い出は、ティエリーの幼少期にしばしば起きた出来事的印象的で複合的な回想であるが、より鮮明な現実感を伴って湧き出てくる記憶もあった。

父親が生涯の仕事を息子に譲り渡す瞬間には、痛切なものがあった。

「父と家族にとって最も重要な瞬間は、私が12歳くらいで、姉のクリスティーンがもう少し大きかった時に訪れました。夕食の時間でした。『私は大きなリスクを負ったところなので、あなた方に話さなければならぬ。うまくいくとは信じているが、何か起こった場合は問題が生じる可能性があることを知っておく必要がある』と父は言ったのです。父はパテック・フィリップを救うため、多額のローンを組んで株を買い戻したと語りました。正確な状況は知りませんが、父は緊張していました。子供に残るイメージでした。父の顔を覚えていただきます。食器、皿、テール、すべてを覚えていました。非常に重要な瞬間であることも分かりました。しかし秀逸にも、数年後、私たちは同じテール、同じ配置で、同じ夕食をとったのです。その時父はこう言いました。「これで安心だ。」彼はパテック・フィリップを買収し、すべてのローンを返済したのです。」

会社の未来が保証されたので、フィリップ・スターンは成功裡に1989年の創業150周年計画を続行することができた。「1989年に発表したタイムピースとキャリバー89は決定的でした」とティエリーは語る。「コレクションを発表した時父は言いました。『私たちは世界最高の時計メーカーとなり、今後ともそうであり続ける。』」

最初は息子および後継者として、現在は家長および社長として、ティエリーは父と交代する時でさえ、父のビジョンを実行するという役割を果たした。その日のことを思い出す彼が、父の決断に対して敬意を抱いていることは明らかである。

前世代から次世代への会社の引き継ぎは、自邸でフィリップ・スターンが息子に象徴的にコインを投げた時に非公式に行われた。これはありきたりの古いコインではなく、1913年鑄造の10ドル金貨に小型のパテック・フィリップ・タイムピースを組み込まれていた(右下の写真)。ティエリーが幼い時に玩具にして遊び、一度紛失したと思われるコイン・ウォッチであった。新たに修復されたこの時計は、ティエリーが次期社長となることを象徴していた。

これは大きな変化でした。ティエリーは考え深げに間を置いて「私も将来同じ目に遭わなければならないでしょうが、それも人生の一部です。」

だがフィリップ・スターンはあまりにも思慮深く、パテック・フィリップをあまりにも愛していたため、この時点で彼のライフワークから完全に離れることはできなかった。「もちろん、父はまだそこにいて私を助けてくれました。父はそのまま立ち去ることはなく、とてもスムーズな引き継ぎでした。」

ティエリーは、父の実績がきわめて正確なタイミングに従って達成されてきたことを確信している。ノーチラス、キャリバー89、スターキャリバー2000、パテック・フィリップ・ミュージアム、ロース通り旧本社の新しいサロン、プラン・レ・ワットな

どのプロジェクトはすべて、カラトラバ十字の会社をさらに圧倒的な高みへ導くのにぴったりのタイミングで導入された。そして同じ生来の、的確なタイミング感覚により、スターン氏はティエリーの時代が来たことを悟ったのである。

「父と一緒にいるのが本当に楽しかったので、数年間は容易ではありませんでした。最近、少し孤独に感じることもあり、父とティエリーは語る。しかしティエリーは、パテック・フィリップを指揮するのにふさわしい資質を受け継いでいるとも感じている。「時代は変わり、私も父とは異なり、祖父に似てクリエイティブなところがあります。しかし父と同じようにかかなり頑固でもあります。これはよい組み合わせだと思います。」



(上) 2008年、プラン・レ・ワットの建物の前に立つフィリップとティエリー・スターン。建設プロジェクト(1996年完成)は、マンユファクチュール全体をひとつの屋根の下に統合するというフィリップ・スターンのビジョンに従っていた。2人の後ろには、髭ぜんまいに似た長さ82mの、スチール製の螺旋型彫刻「Spiral」がある。(下) 2020年に落成したプラン・レ・ワット新工場の建築模型を前にしたフィリップとティエリー・スターン。



PHOTOGRAPHS: JOEL STANS, JOHN SWANNELL/CAMERA PRESS, GRAZIANO VILLA

(右) 1913年鑄造の10ドル金貨から製作されたこの直径35mmの時計は、プレグ数字を配したイエローゴールド文字盤を備えている。ケース側面の5時位置にあるボタンを押すと蓋が開き、時計が現れるが、閉じると元のコインとまったく同じように見える。この時計はティエリー・スターンにとって特別な意味を持っている。会社の社長として後を継ぐ時が来たことを示すため、フィリップ・スターンが彼に与えたものである。(左) スターキャリバー2000を見せるフィリップ・スターン。新しいミレニアムの到来を記念して発表されたこのタイムピースは118個の部品から構成され、回転する星座表を搭載し、開発には8年がかかった。

